（様式５）

視　察　報　告　書

令和６年８月５日

鳥取市議会議長　西村　紳一郎　様

鳥取市議会会派新生
議　員　　西　尾　彰　仁　㊞

令和６年７月２３日から令和６年７月２５日まで鳥取市議会会派新生の視察（調査）に参加したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

所見等：主な視察内容と感想等

１．　あきた芸術劇場について（秋田県秋田市）「秋田市議会」

説明者　秋田市文化振興課長岡部氏、渡辺参事

秋田市の「あきた芸術劇場」の整備についてその施設「通称ミルハス」の視察を行った。当施設は、秋田県民会館と秋田市文化会館がともに老朽化し、秋田市は基より、秋田県全体の文化芸術創造拠点として県と市が共同で８年間検討し、整備に至った施設である。整備の概要は、敷地１７４０１．５５㎡、鉄筋コンクリート一部鉄骨造り地上６階地下１階建て延床面積２２６５３．０８㎡、開館令和４年６月１日、管理運営団体あきた芸術劇場ＡＡＳ共同事業体が行っており、主要施設として大ホール（２００７席）、中ホール（８００席）、小ホールＡ（２５７㎡）小ホールＢ（２０９㎡）そのほか研修室３室、創作室５室、練習室９室、駐車場１９４台分となっており、鳥取市にある県民文化会館（とりぎん文化会館）と機能、設備規模が似ているが、施設規模が大きいと感じた。総業費は２５４億円で、内１０５億円が秋田市負担分であり、この負担割合については、時間を費やし、しっかりとした議論が行われたとのこと。基本的にそれぞれの専有部分、共有部分の延床面積の按分によって県５７.５％　秋田市４２.５％とされて整備された。これは、開館後の運営管理費の負担割合にも適用されている。総事業費の財源としては、国庫３８億円、地方債１８６億円、一般財源９３億円であり、起債の占める割合が多いと感じた。これは交付税算入分を除く負担額としても９３億円あり、財政的な負担も大きかったと感じる。鳥取市にも市民会館ほか３棟の老朽化した市施設があり、県の県民文化会館の改修、改築時期と合えば検討の余地はあると考えるがどこに整備するとよいかとゆう点では、議論が長期にわたる可能性がある。この「ミルハス」の県と市の協議に８年費やしたとのことであるが、鳥取市としては、老朽化の激しい４施設の統廃合を含めた施設整備は待ったなしであることと鳥取市は、駅周辺への整備の方向性を出しているため、県との共同整備は難しいと感じた。施設の建物内を詳細に視察し、やはりとりぎん文化会館にくらべ各種創作室、練習室などが多く整備されていると感じた、ただ施設設計者のデザインなどのこだわりがこのミルハスには多く取り入れられており、秋田県また、秋田市をイメージできる施設なっている。

２．よこて農業創生大学事業について（秋田県横手市）「横手市議会」
説明者　松井課長ほか２名

横手市は、農業生産額が県内１位、２７４億円となっている農業市である。主に米（あきたこまち）であるが、畜産、野菜、果実なども県内１位の農業産出額を誇っている。しかし、農家戸数は、平成１７年１０，９２９戸から令和２年５，７３１戸と半減しており、本市農業を支える人材確保、育成、農業生産拡大と所得向上、農産物の販路拡大、付加価値向上を課題として「よこて農業創生大学事業（２年制）を設立、推進しており、特に横手市とJA秋田ふるさとと連携して行っていることが特徴的であると感じた。作物は、米依存からの脱却を目標として、複合農業を推進しており、「すいか、ねぎ、枝豆、アスパラガス、トマト、きゅうり、ホウレンソウ」の７品目を重点作物として推進している。横手市のこの取組みは、横手市とJA秋田ふるさとと園芸作物振興に関する連携協定を平成２９年締結し、市とJAが農業の活性化向けた連携、就農支援による人材育成に関する連携、その他必要とみとめられる連携事業として取組んでいることである。鳥取市としても中核市であり、JA鳥取いなばと横手市のように連携協定を締結し地域農業の振興を図る必要があると感じた。

No1

視　察　報　告　書

令和６年　８月　５日

鳥取市議会議長　　西村　紳一郎　様

鳥取市議会　　会派　新生
議員　中山　明保

令和６年７月２４日から令和６年７月２６日まで鳥取市議会会派　新生の視察（調査）に参加したので、その結果を下記のおり報告します。

記

（所見等）

（１）　視察先：秋田市　あきた芸術劇場ミルハス

所　見：秋田県と秋田市の共同事業で約２０００席の大ホール１、中ホール１８００席、小ホール２の複合施設で総事業費は２５４億円で、秋田市分は、１０５億円とのことでした。
とても、すばらしい施設であり、県と市の共同事業で実施された点など、今後計画している、鳥取駅周辺事業に大変参考になりました。

（２）　視察先：横手市　よこて農業創生大学事業

所　見：横手市は、秋田県下No1の複合農業を実践している。その人材育成の機関として　よこて農業創生大学校事業を実施している。研修生は、全員で、４０名(内２名女性)研修期間は２年間で、２年間から実践的研修とのことだった。研修生に対して１名当たり毎月１０万円支給されるとのことでした。

また、フォローアップとして　（県･市・JA・
農業委員会）の４者がチームをつくりバックアップ
体制もできていた。ちなみに、４者の職員は２名ずつ
担当レベルとのことだった。
帰り際、研修生（２年目）の方が作られたメロンを試食
しましたが、とても若い方で、横手市内から通われている
とのことで笑顔と目が輝いていたのが印象的でした。
今後、鳥取市の農業の担い手、人材育成に大変参考に
なりました。

以上　視察の報告とします。

（様式２）
別紙

視　察　報　告　書

令和　６年　８月１０日

鳥取市議会議長　　様

鳥取市議会　会派新生
加藤　茂樹　　㊞

令和６年７月２４日から令和６年７月２６日まで鳥取市議会　会派新生の視察（調査）に参加したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

☆令和６年７月２４日（水曜日）

〒０１０－０８７５

秋田市千秋明徳町２番５２号（TEL018-838-5822）

あきた芸術劇場ルミハス

＊概要

・人口　　２９７，０４５人

・世帯　　１３８，８８８世帯

・面積　　９０６．０７Ｋ㎡

＊調査事項

◇あきた芸術劇場整備事業について

・大ホールと中ホールの稼働率は８５％で推移しているとの事でした。

・令和５年度の来場者数は３９万人。

・駐車場においては１時間２００円。

★ホールにおいては、本市においても検討事項であり、しっかりと研究・検討し議論すべきと感じました。

☆令和６年７月２５日（木曜日）

〒０１３－０３５４

秋田県横手市大雄字狐塚２５３番地（TEL0182-38-8034）

横手市園芸振興拠点センター

＊概要

・人口　　８１，５００人

・世帯　　３３，８７８世帯

・面積　　６９２．８０Ｋ㎡

＊調査事項

◇よこて農業創生大学校事業について

・農家の減少化及び高齢化が問題である。

・本施設は、旧中学校の一部建物と、跡地を利用。

・食品衛生法の関係で、いぶりがっこコースを新設。

・６次産業化支援施設棟の使用率は、３００人前後で推移している。

・５年前よりハウスを一棟増やし、現在は１５棟のハウスを運用。

★約５年前のオープン時にお邪魔致してから約５年が経過し、改めて
お邪魔した訳でありますが、つくづく素晴らしい取り組み、考え
運営と感じました。この５年間には、コロナとの闘いがある中
しっかりと運営なされて来られてた事、敬意を表す次第であります。
本市においても、真似るべき点が多々有ると感じました。

視　察　報　告　書

令和６年８月１２日

鳥取市議会議長　西村　紳一郎　様

鳥取市議会　会派新生
吉野　恭介

令和６年７月２４～２６日、会派新生の行政視察（調査）に参加したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

１．視察の目的
　あきた芸術劇場整備事業（秋田市）、よこて農業創生大学校事業（横手市）、湯沢市議会型政策立案等協議の仕組み（湯沢市）、音楽のまち「ゆざわ」推進事業（湯沢市）について調査する。

２．出席者
　鳥取市議会　会派新生＆議会事務局（１３人）
　・会　長：上杉栄一　、副会長：砂田典男
　・委　員：星見健蔵、魚﨑　勇、西尾彰仁、加藤茂樹、中山明保、岡田信俊、寺坂寛夫
　　西村紳一郎、吉野恭介
　・事務局：一村泰志議会事務局次長、稲田　直議会事務局

３．視察（調査）先・内容
　７／１１湯沢市は大雨警報発令し、ＪＲ線など不通になったため、残念ながら視察取り止めとした。

日程	視察先	場所	調査項目	担当者
7/24（水）	秋田市議会	秋田県秋田市	① 秋田芸術劇場（ミルハス）整備事業について	岡部文化振興課長 伊藤観光振興課主席主査 富橋副館長、鈴木統括監
7/25（水）	横手市議会	秋田県横手市	① 農業創生大学校事業について	松井 食農推進課長 原 ブランド推進係長 山初 園芸推進係専門員
7/26（木）	湯沢市議会	秋田県湯沢市	① 湯沢市議会政策立案等協議の仕組み ② 音楽のまち「ゆざわ」推進事業	

４．視察先の状況・感想

視察先	概　　要　・　トピックス
あきた芸術劇場（ミルハス）	・視察の「あきた芸術劇場」は公共施設（秋田県民会館、秋田市文化会館）の老朽化に伴う管理運営の行政課題を機能を保持し県市で共同建設・共同運営する事で課題解決を目指した象徴的施設であった。 ・「文化の創造」「文化に触れる機会の充実」「人が交流する場の創出」の３つの役割を担う事を目的にており、以前にもまして「文化の創造機能」「文化の伝承機能」「コンベンション機能」「賑わい創出機能」「情報提供機能」などの機能を備え充実ＵＰさせた施設になっていた。 ・主要施設（大中小ホール、練習室、駐車場など）を旧施設機能を考慮した結果、県市の負担割合（県５７．５％、市４２．５％）としている点は鳥取市も今後、県市で取組む合同事業などにおいて参考にすべき考え方だと感じた。 ・県から市へ異動して本施設に建設・運営に携わっている担当者の説明を受けた。人の異動を伴う大きな事業だったのだと思う。 ・エスカレータは登り下りあるが、大きなイベント開催時は開場時がどれも登り、閉場時はどれも下りとするなど、指定管理者が運用管理している。 ・愛称ミルハスの「ミル」は多いと言う意味、「ハス」は蓮の花を連想させた名称で公募によって決定した。 ・壁などコンクリートの面も木材をイメージ（木目）させる施工をされており、細部への拘りを感じた。 ・中ホールは舞台芸術用のホール。天井も低く声の抜け感がない造り（声がハキハキして聞こえる）。ただ音楽の演奏会が出来ないと言う訳ではない（音響反射板など舞台上に設置している）。１年目は平原綾香のコンサートを行った。下が５００名、上が３００名入れるホール。分割利用も可。 ・創作室は演奏会などの利用だけでなくスクリーン下ろし講演会としての利用も可能な造りとしている。 ・大ホールは２００７席（１階１３８０席、２階６２７席）。音響設計をして館内設計している。残響時間（６０ｄｂ下がった時の時間）、空席時２．３秒、満席時２．１　秒。ハレを意識し赤色基調の館内設計としている。開館記念式典時、秋田吹奏楽団、秋田県合唱連盟による「大いなる秋田」という県歌を披露。壁は全て音響反射板が設置されていた。 　開館記念式典はＲ４年６月１日、グランドオープンはＲ４年９月２３日。新日本フィル交響楽団のコンサートを行いお祝いをした。 ・建設物の重量を支える構造は勿論、使用者サービスに繋がる機材の搬入口からの動線、何千万円もするピアノの保管、控室・練習室と本番ステージ会場との動線、大きなエレベータなど、また観客サービスに繋がる音に対する配慮などなど至る所に高い満足度を得られる施設だと感じた。 ・年間の指定管理料、約３．１億円。
横手市	■概要 ・Ｒ１年に「食と農のまちづくり」で視察させて頂いてから５年間経過し、その後の深化を学ぶ。 ・昨日からの大雨で被害（冠水や土砂崩れによる通行止め、河川の増水で

４．８万世帯に避難指示が出されている状況）が出ている中、受け入れて頂いた。

・横手市はＨ１７年１市７町村が合併した市で、当時人口１０万人・現在８万人台、県Ｎｏ１の複合農業の産地として発展した市。その事を下支えしている施設である。人口減少が進んでいる地。

・農業の特徴・・・市総面積の２５％が農地。農地の９割が水田。あきたこまち、果樹、花き、畜産･･･様々な農産物の産地。県内では複合経営が最も進んでいる地域。

・野菜･･･スイカ、トマト、キュウリ、アスパラなど
果樹･･･リンゴ（県内生産量の７割）

・近年は、菌床シイタケ・ホウレン草など施設栽培が盛ん

・農業産出額は２７４億円で９年連続で県内ＴＯＰ。コメは５割を下回る。

・総農家数は約２０年で半減（１１千戸⇒５．７千戸）。離農・法人化・集落営農（組織化）が進んでいるのが要因。従事者が減少。平均年齢６８歳と高齢化も進んでいる。

・重点振興作物（７種）の作付け面積は高齢化により殆どが減少傾向。

・課題・・・①農業従事者が減少する一方、高齢化も進んでいる。人材育成・確保。②農業所得向上。③農産物の販路拡大・付加価値向上
※以前からの根源的な課題。全国共通の課題でもある。

■よこて農業創生事業

・Ｈ２７年度に開始した事業で、地元ＪＡと連携（Ｈ２９年、園芸作物振興に関する連携協定締結）したのがポイント。・・・全国的にも稀。

・農業の地方創生事業・・・野菜・花きといった「園芸作物」に係る取組を強化推進。農業所得の向上と担い手の確保・育成を図る

・背景・・・**①農家所得の減少**　②担い手の不足
※稲作が主体の地域であり米価の影響を受けやすく、米価は低空飛行を続け、資材・燃料費も高騰

・方針・・・農業を産業として成り立つモノにする。稲作に頼らず、所得を上げる取組が必要。

・複合化を推進・・・収益性の高い「園芸作物」の導入を推進する。
※収益性高く、新規就農者でも取組みやすい

・種苗支援⇒商業性の拡大を狙い指定管理制に移行（ＪＡ）
園芸振興を強力に推進する

・事業の推進エンジン＝園芸振興推進会議
構成：市（関係３課）、ＪＡ（関係４課）、県もオブザーバ参加
※販売担当の商工観光部も参画
※会長は市農林部長、副会長はＪＡ営農経済部長、事務局は市職能推進課
分科会：３分科会毎のアクションプラン策定し推進
期　間：アクションプランの期間は３年間（ホームページで公開）
毎年実績を検証し、見直し改善
担　当：役割分担・スケジュールを決め推進
取組主体部門、連携部門を明確にしている（５Ｗ１Ｈ）

・取組推進・・・１期プラン⇒２期プラン（Ｒ６年が最終年）⇒３期プラ

	ン立案（２期プランを成果検証） ・人づくり・・・食農推進課が担当 ① 市内就農を目指す人を「農業技術研修生」として２年間受入れ ② １年目は基礎学習⇒２年目は１品目選び栽培～出荷・販売（仮想経営）で実践 ③ 研修・講習は、新規就農者向け・農業経営者向け・食品加工者向け・一般市民向け　・・・など様々用意されている ・農業所得を上げる、農業経営と言う事に真正面から取り組んでいる横手市の取組に感銘を受けた。その１つの形が農業創生大学校。 何か枠組があった方がやり易いと言う事で、ソフト事業名として「農業創生大学校」を設け、センターで行う事業のフラットフォームとしている。 Ｈ３１年に廃校の跡地を活用しオープン（本年度で６年目）。 敷地面積３．４ｈａ（２．５ｈａ拠点センタ、０．９ｈａコミュニティセンタ・ジュース加工場） ・センター事業期間：Ｈ２８年度～３０年度（３ヶ年） ・総事業費：約８億円（解体費含む） ・主な施設整備： ① 管理研修棟　・・・廃校となった唯一の耐震構造施設を活用 ② ６次産業化支援施設棟・・・木造平屋、有料貸出、用途に応じた設備を設置。 ③ 栽培実証施設（ハウス）・・・全１５棟（７棟に暖房設備） 間口４間、奥行き２０間（３６ｍ）

５．質疑応答・所感

市議会	所　　感
秋田市	Ｑ１：県市の統合施設としたために予定していた付加出来なかった機能はあるか？ Ａ１：県市で譲れなかった機能はなかった。ただ、中ホール（市）の設計段階で大ホール（県）の様な音響反射板の設置について議論があった。その点もホールの機能を演奏主体・演劇主体など明確に機能分担し、可動式の音響反射板を設ける事で対応できるなど譲れない部分はなかった。 Ｑ２：鳥取市にも２０００席（県）、５００席（市）の施設がある。県市で統合した効果としてはどういった事で表れているのか？稼働率の点での変化が現れているか？ Ａ２：大ホール中ホールとも、県民会館がこの場所にあったので、それを取壊して建てると言う事で２０００席の大きなホールが４年間稼働していなかった。秋田県には大きなイベント物が持って来れなかったストレスが経済会、観光協会などにあった。完成後は大・中ホールともに高い稼働率８５％で推移している。文化団体など、一度使用すると、来年も使用したいとのリピート要望が強い。全国大会などは２年前から予約受付けているが既に週末の予約は立込んでおり順調な予約となっている。余程、市民の皆さんが待ち望んでいた施設だったのだと思う。 ⇒リピートが多いと言う事から、施設の満足度が高いのだと思う。秋田市民の文化度の高さのせいかもと思う時、同じ様な施設を鳥取市に設置して同じ様なリピートや稼働率が得られるのか、別の仕掛けを考えないといけないのか調査も必要と感じた。

Ｑ３：利用者数はどれ位？
Ａ３：Ｒ５年度は３９万人（目標は３５万人）。なお、１階は２３時までオープンスペースとしていて、正面裏面にカウンターを設け入場者を自動カウントしている。その数値では４８万人。郊外型の大きな施設・ふるさと村というのが横手市にあり自動カウントでは４５万人。なので本施設は中心市街地にあり人の流れが戻って来ているのではないかと評価している。
Ｑ４：中心市街地に人の流れが戻ってきたと言う話があった。鳥取市も今後１０年かけ公共公益施設（ホール、ギャラリー、図書機能）として駅前再開発を考えているが、公益施設だけでは人は集まらない、民間との相乗効果ないと人は戻って来ないと考えている。近隣の商業施設などに人の流れなど、波及効果があったのか？
Ａ４：芸術文化ゾーンの中に千秋美術館があり、仲通り商店街がある。駅から１０分位の所。秋田駅から堀の上に遊歩道を整備したり観光客の賑わい創出や回遊性も併せて整備して来ている。効果として一定の評価が出来るのではないか。また、商店街のお蕎麦屋さんとか、比較的高齢者が好むお店には演歌などのイベントする来客もおおく、コンサートの内容によって、仕込み量を変える様になってきている。
⇒併せて他の事業を行おう、行えば賑わい創出に繋がるとの機運があると言う事であり、コンサートの内容によって商業街の賑わいや来客者の質が変わると言う事からも、本施設（ミルハス）が呼び水となって再開発が順調に進んでいると捉えて良いと考える。
Ｑ５：ホールの稼働率８５％と聞いたが、貸館事業として成り立っているのか？駐車場は１９４台だが少ないと言う声はないのか？
Ａ５：貸館事業というより指定管理料として頂いているが利用料金併用制と言う事で前の県民会館時代から利用料金併用制でした。Ｒ４年度・５年度共に黒字。
　駐車場は、少ないと言うのが周知されていて、他の公営駐車場など他の施設が多くあるので、余り混乱はない。民間の駐車料金と同じ（１時間１００円、１時間ごとに１００円ＵＰ）。仲市はもう少し安いのでそこに停めて来られる方も多い。
Ｑ６：１００円バス「ぐるる」の便数が１時間１本と少ないが苦情出ないか。
Ａ６：自家用車利用が多いので苦情は少ない。
⇒地方都市の悩みは同じだが、鳥取市も秋田市もモーダルシフトの動きをしなければならないのではと感じた。
Ｑ７：イベントの集客を目的に公共交通とのタイアップ、脱炭素を目指し自家用車は市外に駐車し、そこから公共交通利用などのモーダルシフトの動きはされているのか。
Ａ７：人が往来する形で中心市街地の賑わいを創出するＰＪを立ち上げている。その場で議論している段階。周遊性・回遊性を上げるためにお堀に遊歩道を造った。秋田駅から来るのも観光を意識して周遊性を上げられるよう寄り道コースなど考慮している。
Ｑ８：県市の建物の老朽状態が４０年と６０年で差があったのに、このタイミングで統合施設を造ろうと話が決まったのは何故？かなり以前から話があった？
Ａ８：それまで設備の更新や音響設備をしていなかった。秋田市の公団と文化財課の更新予算に数十億とかかる事が判明。建物の改修と設備の更新時期がマッチングしたということで検討を始めた。
Ｑ９：施設利用者の年代などは特徴があるか？
Ａ９：データは採っていないが、高齢のお客が多い感じ。
Ｑ１０：市と県はどちらかと言えば張り合っているお互いだと思うが、負担割合な

	ど、実際の所、県市の連携はどうだったか？ Ａ１０：施設の構成が決まってしまえば、負担割合も決まり、指定管理料も決まり、困った事は殆どない。 ⇒県市の間で余程、想いや考えなど動機付けが一致していたのだと思う。出来た施設は、本施設の様に明確なコンセプトを持った施設となるのは必然なのだろう。 Ｑ１１：公開プレゼンテーションで発注先を決めたと言う事だが設計・建設（ＪＶ)、にはどんな関係者（地元？）が携わっていたのか？ Ａ１１：あきた芸術劇場ＡＡＳ共同企業体（代表：一般財団法人秋田県総合公社） Ｑ１２：県市で共同整備事業する場合、発注の仕組みは？ Ａ１２：設計に関しては県知事発注（県市の技師・事務職が詳細は担当） 県が主体的に業者選定し発注者は知事の流れ。 Ｑ１３：自動販売機が２台だが飲食は抑制の考えか？ Ａ１３：美術館などと同様にハイソサイエティな施設にしたいという意向があった。飲食関係、トイレなど対象。今後、指定管理者が検討予定。
横手市	Ｑ１：４０名の研修生のフォローアップについて尋ねる？ Ａ１：営農を定着させる重要は大切だと考えている。１年目２年目は時間通りやれているか？という辺りのサポートをしている。なので、市・県・ＪＡ・農業委員会でサポートチーム作り訪問面談確認している。市は悩み相談相手、ＪＡは資金面での支援や相談相手、県は技術面などチームで営農者をフォローしている。 Ｑ２：研修生に女性はいるか？ Ａ２：３名いる Ｑ３：「ＪＡあきたふるさと」との連携が素晴らしい。鳥取市もふるさと就農者の取組は行っていて、最初は良かったが持続が難しい状態。「あきたふるさと」の行政区域というのはどの程度か？米が主流だがどの様な品種を主力にしているのか？ Ａ３：ＪＡの管轄エリアは、横手市・ＪＡ・県の出先機関が管轄しているエリアは全て同じ。なので非常にやり易い環境にしている。 米のブランド品種は「秋田こまち」、最近のブランドとして「さきほこれ」 園芸では、スイカ（県がオリジナルで作った「あきた夏丸」、シャリ感が強く、大玉・小玉が作り易い） Ｑ４：県内一の畜産の支援はどのよう？ Ａ４：農業振興課が担当しているが、前年の飼料の高騰を受け、年度途中で補正予算化して資料高騰に対応した。 Ｑ５：産業化について、前回、２３ヶ所の直売所がある。その直売所の売上が３００万円前後だったと記憶している。そうした６次産業化の育成について説明受けた。課題として、学校給食への拡大展開、加工の需給ＧＡＰにの進捗を尋ねる？ Ａ５：直売所について把握している限りでは、減っていない。経営者の高齢で売上も同等レベル。売上も変化ない。ただ、イオンに入っている直売所はプラスとなっている。 学校給食の動きですが、学校給食野菜出荷農家会というのがあり、リンゴのコンフォートを作り学校給食に提供している。 Ｑ６：軽トラ朝市は現在どうなっているか？ Ａ６：軽トラ朝イチは現在もやっている。 Ｑ７：複合経営・畑地化に取組んでいる農家において、米に代わる作物としてイチゴはどの程度されている？

	Ａ７：管内でイチゴ栽培している農家はいない。冬、米に代わる園芸作物としてハウスでイチゴをやろうとしたが、施設が高価すぎた。イチゴについては、子ども向けの食農体験として割り切ってやっている。 Ｑ８：果樹（リンゴ、ブドウ）などに対する高温対策はどのようか？ Ａ８：昨年、高温の影響を受け、６月はサクランボの収穫期だったが、かなり収穫が減った。高温対策は必須条件になって来たので、第３次アクションプランには必ず盛り込む計画である。 ⇒高温の影響が農業に影響を与えているとは高温対策の大きさを感じた。 Ｑ９：ブランド戦略をどの様に深めようとしているのか？ Ａ９：基本的に伝統野菜とか園芸野菜を継承していく。 Ｑ１０：秋田の農業をリードされようと感じたが、どの様にリードすべきかと言う点について以前にも増して見えて来たモノはあるか？ Ａ１０：コメ依存からの脱却。メガ団地的に園芸農業に県と一緒に取組もうとしている。横手市もメガ団地を作って今園芸の生産拡大に努めている所。園芸では一時的な労働力が必要になるが、短期の労働力が中々集まらない事が課題。ＪＡさんと無料の職業紹介所というのを作り、そこで時期アクションプランの大きな課題として労働力問題を掲げる。 ⇒農業の将来の形は園芸のメガ団地、大きな課題は労働力問題。だという事がよく分かった。

秋田市①

秋田市②

秋田市③

秋田市④

秋田市⑤

秋田市⑥

横手市①

横手市②

横手市③

様式５

視　察　報　告　書（委員用）

6年 8月 2日

鳥取市議会議長　　様

鳥取市議会~~会派(新生委員会~~
委員 星見健蔵 ㊞

6年 7月 24日から 6年 7月 26日まで鳥取市議会~~会派(新生委員会~~の視察（調査）に参加したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

所見等：

令和6年7月24日(水) 秋田県秋田市あきた芸術劇場視察
○あきた芸術劇場整備事業について

令和6年7月25日(木) 秋田県横手市園芸振興拠点センター視察
○よこて農業創生大学事業第二期アクションプランについて

令和6年7月26日(金) 秋田県湯沢市議会視察
○豪雨災害により視察を中止に

令和6年7月24日（水） 秋田県あきた芸術劇場ミルハス視察

〇秋田市は、明治22年4月1日市制施行、平成9年4月1日に中核市へ移行、その後、河辺郡の2町と合併し、令和6年4月1日現在、人口29万6,828人（13万8,175世帯）で、一世帯当たり平均2.15人となっている。
稲穂に見立てた竿燈を用いて、厄除け、五穀豊穣を祈願する、東北三大祭の一つ、竿燈（かんとう）まつりは、国指定重要無形民俗文化財に指定され、270年もの間受け継がれている。また、土崎神明社祭の曳山（ひきやま）行事は、ユネスコ無形文化遺産に登録されるなど、文化芸術のまちとして、多くの人を魅了している。

〇あきた芸術劇場整備事業について
秋田市では、持続可能な都市の実現に向け、投資効率が高く、コンパクトで成熟した市街地形成を図ることを基本として、まちづくりに取りくんできた。こうした行政改革や、まちづくりの視点から、老朽化した秋田市文化会館については、中心市街地への移転を視野に将来のあり方を検討していた。一方、秋田県においても、市と共通する行政改革やまちづくりの視点を含め、老朽化が著しい秋田県民会館の将来のあり方を検討していた。同じ課題を抱え、同じ方向性で将来のあり方が検討されていた二つの施設が結びつき、市と県の垂直的連携による共同整備を目指すことになったようです。2013年度には、有識者による文化施設整備構想検討委員会を県と市が共同で設置、2014年度には、「新たな文化施設に関する基本計画」、2015年度には、「県民会館・市文化会館の建て替えによる県・市連携文化施設整備方針」を策定、パブリックコメントや県内各市町村で、住民や文化団体との意見交換会など開催し、2017年1月には、具体的な施設機能や施設配置案、整備スケジュールなどで構成する、「県・市連携文化施設に関する整備計画」を策定、2018年1月に基本設計、2019年3月に実施設計を完了、7月に着工し、2022年3月に竣工となっている。

○指定管理者を、あきた芸術劇場ミルハスAAS共同事業体とし、指定管理期間は、5年間（令和4年~令和8年）、指定管理料5年間総額15億3,566万8,000円（うち市負担額6億5,266万円）、利用効率85%で、黒字経営となっている。

○あきた芸術劇場ミルハスの総事業費は、254億円（うち市負担105億円）、詳細は、国庫補助金38億円（うち市15億円）、地方債186億円（うち市77億円）、一般財源30億円（うち市13億円）で、交付税等活用し、実質負担は、123億円（うち51億円が市負担）となっている。

○あきた芸術劇場ミルハスの施設について
秋田県と秋田市が共同で整備した、全国でも例のない文化施設（ミルハス）、2022年6月にオープン。大ホール（2,007席）は、高い音響性能と舞台機能を併せ持ち、クラシック・歌舞伎・オペラ・ロック・ミュージカル・Jポップなど、幅広い演目に対応できるもの、中ホール（800席）は、演劇・ダンスを中心に音楽まで、幅広い演目に対応できる舞台設備を持ち、観客が舞台に集中できるものとなっている。その他、二つの小ホール、練習室、研修室、創作室を備えた文化施設で、ミルハス内には、秋田杉がふんだんに使用され、樺細工や川連漆器、大館曲げわっぱなどの、伝統工芸品が随所にちりばめられており、秋田の魅力を十分に感じ取れるものとなっている。鳥取市においても、市民会館や、文化施設の老朽化に伴い、施設の建設が検討されているが、鳥取の文化・芸術の創造拠点として、魅力あるものにしていくことが、求められている。

令和6年7月25日（木） 秋田県横手市園芸振興拠点センター視察

○横手市は、平成17年10月1日に、旧横手市と旧平鹿郡の8市町村が合併し、人口8万1,606人（3万3,786世帯）で、秋田県南部の奥羽山脈や出羽丘陵などに囲まれた横手盆地の中央にあり、日本海側有数の豪雪地帯（年平均約110cm）として知られている。

○よこて農業創生大学事業第2期アクションプランについて
横手市の耕地面積は、176k㎡で、市全体の25%を占め、水田農業を中心とした複合経営地帯で、年間の農業産出額が274億円と県内1位、東北5位、全国36位となっている。しかし、総農家数がこの20年で半減（5,731戸）し、農業従事者の平均年齢も、68歳と高齢化が進んでいる。このような状況から、①農業を支える人材の確保・育成、②農業の生産拡大と所得向上、③農産物の販路拡大・付加価値向上の課題を掲げ、よこて農業創生大学事業を市とJAが平成29年11月から取り組んでいる。横手市はもともと稲作中心の地域であったが、米価の影響を受けやすく、収益性の高い「園芸作物」の導入を推進し、複合経営による所得向上に結び付けるとしている。令和4年3月策定の第2期アクションプランでは、横手市重点振興作物（スイカ・ネギ・枝豆・アスパラガス・トマト・きゅうり・ホウレン草・花き）の8品目について、生産者が安定した所得を得られ、経営の柱とすることが出来るよう、作付誘導や、栽培技術の向上を中心とした取組により、品質の安定化、収量の向上を図り、競争力を強化する方向で、8つの重点施策を掲げている。①重点振興作物の競争力強化、②新規作物等の栽培実証と販路の構築、③園芸を経営の柱とする農業者の育成、④園芸導入による経営拡大とレベルアップのサポート、⑤苗供給の拡大、⑥販路拡大の支援強化、⑦園芸振興拠点センターの活用と6次産業の活性化、⑧施設を活用した食育の場の提供により、農業者の所得向上と担い手の確保・育成を目的としている。

○6次産業化支援施設では、6次産業化に取り組もうとしている個人や団体の方々に、農産加工へのチャレンジやノウハウを学んでもらうため、広く利用いただくことを目的に、土曜・日曜・祝日・年末年始6日間を休所とし、午前9時から午後5時まで開所している。1時間当たり200円から550円の使用料金を設定し、市内と市外（2倍）の料金格差をつけている。また、施設では地元の農産物を使用した新商品開発に対する支援や、食品加工の基礎等を習得するための講座の開催、カット野菜などの一次加工や、農業者、商工業者が地元の農産物を活用した加工品の試作・開発などに取り組む場として活用いただき、加工分野での販売額向上を目指すとされている。

○よこて農業創生大学校農業技術研修では、市内での就農を目指す方を、農業技術研修生として受け入れ、2年間の長期研修を行っている。平成24年度から令和5年度までに、40名が研修を終了し、令和6年度は10名が在籍している。また、園芸振興拠点センター内では、保育園児にいちご収穫体験の実施や、小学生の野菜定植・収穫体験中学生のオープンスクールなどを実施し、農業に関心を持ってもらうことで、担い手育成につなげる活動も行っている。
担い手不足、農業従事者の高齢化から、離農や廃業が進む中、市の農業振興課や、食育推進課などがJAと一体となり、取り組む事業として、全国的にもまれな事業と言えますが、鳥取市としても見習うべき事業だと思います。

視　察　報　告　書

令和６年８月８日

鳥取市議会議長　西村　紳一郎　様

鳥取市議会　会派新生
魚　﨑　　勇

令和６年７月２４日から令和６年７月２６日まで鳥取市議会　会派新生の視察（調査）に参加したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

所見等：

令和６年７月２４日（水）
秋田県秋田市議会
秋田市の概要
- 人　口：297,045 人（令和６年６月１日現在）
- 世帯数：138,888 世帯
- 予　算：約 1,440 億円（一般会計）

あきた芸術劇場整備事業について

コンセプト
秋田の文化力を高め、文化の力で地域を元気にしていく
- 文化創造に向けた取り組みの活性化を図る
- 文化に触れる機会の拡充を図る
- 人が集う「場」を創出することで、地域の活性化に貢献する

施設概要
- 建設地　：秋田市千秋明徳町２番５２号（面積１７，４０１．５５㎡）
- 本体建物：RC 構造一部鉄骨　地上６階地下１階建て
（延床面積２２，６５３．０８㎡）
- 開館日　：令和４年６月１日
- 指定管理者：あきた芸術劇場 AAS 共同事業体
（代表者）一般財団法人秋田県総合公社
- 主要施設：大ホール（2,007 席）、中ホール（800 席）、小ホール A（257 席）、小ホール B（208 席）、研修室３室、創作室５室、練習室９室、駐車場棟（194 台）,その他

事業費
- 総事業費：　２５４億円（１０５億円）　※（）は秋田市分

内訳	国補助	３８億円	（　１５億円）
	地方債	１８６億円	（　７７億円）
	※交付税参入	９３億円	（　３９億円）
	交付税除く負担額	９３億円	（　３８億円）
	一般財源	３０億円	（　１３億円）
	実質負担額	１２３億円	（　５１億円）

施設運営の基本的展開

・国内外に発信する自主企画事業の推進
・鑑賞機会の充実と発表の場の提供
・県民・市民の工夫を生かした各種イベント・大規模会議等の開催
・情報発信と県内市町村文化施設との連携
・文化芸術に親しみ・集い・交流する活気に満ちた県民・市民の広場づくり

主な運営方針

・自主企画事業の推進
　秋田の文化芸術を国内外に発信
　大規模な舞台芸術等の鑑賞機会の充実
　周辺の文化施設との連携による中心市街地全体を意識したにぎわいづくり
・貸館事業
　利用形態に対応した柔軟な利用規則の制定
　芸術活動の向上に向けた利用者への積極的なアドバイス・提案
　多様な利用方法に対応した利用料金体系の構築
・広報・PR 事業
　文化芸術に親しめる、わかりやすい情報発信
　多国籍利用者への管内案内の導入

所感

あきた芸術劇場ミルハスは名の通り「城跡の堀に咲く蓮」劇場の名称にしている。大ホールは収容客席２，００７人とかなりの客席を用意している。東北日本海側の中心都市を意識した大規模な施設となっていて、特に秋田県と秋田市が協力してこの事業を推進していることは非常に参考となった。

令和６年７月２５日（木）

秋田県横手市議会
横手市の概要

- 人　口：81,500 人（令和６年５月３１日現在）
- 世帯数：33,878 世帯
- 予　算：約 587 億円（一般会計）

よこて農業創生大学校事業について

目的

・横手市園芸振興拠点センターでの栽培実証等を通して、野菜・花きなどの園芸栽培に関する基礎的・実践的な知識・技術を広く習得し、卒業後の農業経営に活かす。

取り組み

１．第２期アクションプラン

・重点振興作物の競争力強化
・新規作物等の栽培実証と販路の構築
・園芸を経営の柱とする農業者の育成
・園芸導入による経営拡大とレベルアップのサポート
・苗供給の拡大
・販売拡大の支援強化
・園芸振興拠点センターの活用と６次産業の活性化
・施設を活用した食育の場の提供

２．成果指標・成果目標

・重点振興作物の競争力強化
　スイカ、ねぎ、枝豆、アスパラガス、トマト、きゅうり、ほうれん草、花きの出荷量と販売額の増加
・新規作物等の栽培実証と販路の構築
　年１０品種以上と普及開始　R４：４３品目、１１７品種
　R５：４１品目、１０８品種
・園芸を経営の柱とする農業者の育成
　年５人の新規就農と５年後定着率１００％　R４：５人、１００％
　R５：４人、１００％
・園芸導入による経営拡大とレベルアップのサポート
　重点振興作物の 10a 当たり収量のアップ
・苗供給の拡大　　種苗供給数　R５：９５．８万本→R６：１００万本
・販売拡大の支援強化
　市と JA の連携ネットワーク連携事業年５回　R４：３回　R５：３回
・園芸振興拠点センターの活用と６次産業の活性化
　６次産業化支援施設の利用件数　R５：１６８件　R６：１７０件
　加工品販売額の県内シェア　　R４：３３．１％　R６：４０％
・施設を活用した食育の場の提供
　農業体験の受入れ年２０件以上　R４：２１件　R５：２１件

所感

横手市は耕地面積が１７６ｋ㎡と市全体面積の２５％ある。従来稲作中心の農業経営であったが、近年の米価低迷による農家所得の伸び悩みを解消するため、園芸作物を導入した複合農業経営への転換に力を入れている。

複合農業経営への転換は作業量が格段に増加する中で、従事者の高齢化のため経営継承者の確保が課題となっている。

この、経営継承者の確保の課題を解決するため、横手版農業の地方創生事業として「よこて農業創生大学事業」を開始している。従来からの横手市園芸振興拠点センターを活用して、園芸試験による特産品の開発、各種苗の供給、就農人材の育成、農産物加工品の６次産業化と、秋田県、ＪＡあきたと協力した施策を推進している。

鳥取市独自の農業特産物開発、就農人材の育成、農産物加工品の６次産業化等の推進事例として非常に参考になった。

（様式５）

視　察　報　告　書（会派用）

令和６年　８月１６日

鳥取市議会議長　　様

会派新生
西 村 紳 一 郎　　㊞

令和６年７月２４日から令和６年７月２６日まで鳥取市議会会派新生の行政視察（調査）に参加したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

所見等：

「秋田芸術劇場ミルハスについて」

７月２４日（水）ＪＲ秋田駅西口より循環バス「ぐるる」にてミルハス訪問。秋田県民会館と秋田市文化会館の機能を継承し、秋田県と秋田市が共同で整備した施設です。秋田県全体の文化芸術の創造拠点施設で素晴らしい施設である。総事業費２５４億円で着工から８年の歳月を掛けて完成している。負担割合は秋田県：５７．５％、秋田市：４２．５％、この割合は運営管理費にも適用されています。基本コンセプトは“秋田の文化力を高め、文化の力で地域を元気にしていく”で文化創造に向けた取組の活性化を図り、文化に触れる機会の拡充を図るとともに、人が集う「場」を創出することで、地域の活性化に貢献する役割を担っている。大ホール、中ホール、小ホールＡ・Ｂ、研修室、創作室、練習室などを見学した。長い年月を掛けて建設された意図が随所に見られた。私は特筆したいのはメインエントランスの両脇の多目的スペースと情報発信スペースです。フリースペースにカウンター席を配し、だれでも自由に利用出来ます。視察当日も多くの若者が利用していました。夜１１時まで対応しているとのことでした。４階までの吹き抜けで、明るく開放的なフリースペースにミルハスの魅力を感じました。　午後４時３０分研修会終了。芸術劇場ミルハスを後にした。

「よこて農業創生大学事業について」

７月２５日（木）午後１時３０分横手市議会マイクロバスにて現地到着。

横手市議会青山豊副議長に歓迎のご挨拶と横手市の概要説明を受けた。

実は横手市園芸振興センターは会派視察で、令和元年１１月１８日に訪れています。秋田県第２の都市横手市は農業が基幹産業であり、「食と農からのまちづくり事業」を展開されており、その柱に６次産業化の推進が掲げられ、農業の担い手確保対策に力を入れて「人を育て、農業で生き残れる道を開こう」をスローガンに取組されていたことを報告書に記載していました。正に５年後も色あせることなく農業に真剣な横手市を確認しました。このたびのテーマは「よこて農業創生大学事業」です。横手市の農業の課題として、①農業を支える人材の確保・育成、②農業の生産拡大と所得向上、③農産物の販路拡大・付加価値向上　が挙げられています。また事業実施に至る背景として、農家所得の減少（横手市は稲作主体の地域）で、米価の影響を受けやすいことから、米依存からの脱却が課題となり、収益性の高い園芸作物の導入推進により「複合農業の推進」を目指し、所得向上に繋げることである。よこて農業創生事業は、園芸作物の生産振興、人材の育成、６次産業化支援などの取組を展開。「所得の確保が出来る」「若者が希望を持って就農出来る」農業の実現を目指しています。

農業研修生の受け入れについて質問：２年後のフォローアップ体制について、及び女性の研修生実績について２点。フォローアップはＪＡ・農業委員会・横手市・農業改良普及センター（県）が連携して更に１～２年サポート支援する。

令和５年度までに４０名の研修の修了実績である。リタイアは特別の理由で数名と報告有り。また、４０名のうち女性は３名との説明であった。女性の農業研修生の受入に力を入れたらと感じました。事業推進に当たっては園芸振興推進会議を組織し、アクションプラン策定により、ローリングを実施し、ＰＤＣＡサイクルを回して、目的達成に繋げています。今後の横手市の農業に注目したい。

雨の中、施設をバスで巡って、概要説明を受けた。午後３時３０分研修終了。

視　察　報　告　書

令和６年８月３日

鳥取市議会議長　西村 紳一郎　様

鳥取市議会　会派新生
岡田信俊

令和６年７月24日から７月26日まで鳥取市議会　会派新生の視察（調査）に参加したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

秋田県秋田市（24日）

○「ミルハス」について

「ミルハス」とは、あきた芸術劇場の名称である。2022年６月に新たな秋田の文化芸術の拠点として秋田市千秋明徳町の秋田県民会館跡地に開館したものである。

老朽化した秋田県民会館（S36年築、H30年５月末閉館）及び、秋田市民文化会館（S55年築、R4年９月末閉館）両者の機能を継承し、秋田県と秋田市が共同で整備した全国でも例のない、あらたな文化施設である。いずれも秋田市の都市機能として欠かすことのできない施設であり他に代替えできる施設はない。この二つの施設を継承するミルハスは、「秋田の文化力を高め、文化の力で地域を元気にしていく」ことを基本目標に、秋田市及び秋田県全体の文化振興と文化創造の中核施設となるものである。

本体建物は、鉄筋コンクリート造一部鉄骨造、地上６階地下１階建て。開館日は令和４年６月。管理運営は、指定管理者・あきた芸術劇場AAS共同事業体。主要施設として、大ホール（2,007席）、中ホール（800席）、小ホールA（257㎡）、小ホールB（208㎡）、研修室３室、創作室５室、駐車場（194台）、その他である。

事業費は、総事業費254億円（105億円）。（　）内は秋田市分。

① 国庫補助金　38億円　（15億円）
② 地方債　186億円　（77億円）
③ 交付税参入除く負担額　93億円　（38億円）
④ 一般財源　30億円　（13億円）

県・市連携文化施設は、県と秋田市が共同で整備・運営していくものであるが、高機能型ホールは県民会館大ホール、舞台芸術型ホールは、秋田市文化会

館大ホールの代替施設とみなし、ホール部分はそれぞれの専有割合とし、他のスペースは県・市折半として費用負担割合を算定しておられる。なお、この負担割合の考え方は、閉館後の管理運営費にも適用されている。これらに基づく負担割合は、県：57.5%　秋田市：42.5%である。

本市に置き換えるなら、県民文化会館と市民会館を同時に新設したようなものであり、合理的であるが偶然的な要素もあり他都市が簡単にまねることはできないが、先進事例であると考える。やはり負担割合の決定は簡単に行かず、議論を重ねられたようである。

館内には秋田独特の、曲げわっぱや秋田杉などがふんだんに使用され温かみを感じる。偶然的な要素があり設置できたものであるが、負担割合の決定や、単純に新技術を取り入れた高機能型ホールとしての先進事例として学ぶ要素は多いと感じた。

秋田県横手市議会（25日）

○食と農からのまちづくりについて（横手市園芸振興拠点センター）

横手市は、秋田県南部に位置し、奥羽山脈、出羽丘陵などの山々に囲まれた盆地である。2005年に1市5町2村が合併しており広大な農業に適した市域を持っている。面積は692.80㎢。人口は約81,400人。19年間で約24,000人減少している。

全国生産量第2位の「あきたこまち」米や、全国有数の生産量を誇るホップをはじめ、アスパラガス、しいたけ、桃、りんご、すいか、ぶどう、などの生産量は県内トップである。

しかしながら、農業者の高齢化や後継者不足、耕作放棄地の拡大など、また、収益率が下がっていることに加え、経費の拡大など問題点は多い。何とか所得を上げ問題点を解決しようとしている。そのためにＪＡの協力もお願いし、売れる農産物を確保すること、将来の為に幼少期からの食育活動等に力を入れている。

市では、産業経済部とも力を合わせて、産業を元気にしようと、地域の農産品と独自の食文化を核にして「食と農からのまちづくり」を推進している。第2次、横手市農業振興計画（平成28年～平成38年（令和8年））では、魅力ある地域資源を活用し、人を呼び、仕事を生み出す産業の振興を図る事を目的としている。

このような中、令和元年4月に「横手市園芸振興拠点センター」をオープンさせている。これは廃校になった中学校の校舎を活用し設置したものであり、約3.4ｈａ、約8億円をかけている。内容としては、1、研修・栽培実証施設、①育苗・接木ハウス、②栽培実証ハウス、③研修実証ハウス、④研修用圃

場（60ａ），⑤食農体験ハウス、⑥車庫作業棟、⑦格納庫、2、管理研修棟、３、6次産業化支援施設棟、からできている。この施設は、農業の6次産業化に取り組もうとする個人や団体の皆様に、農業加工へのチャレンジやノウハウを学んでもらうため広く利用いただける。地元の農産物を利用した新商品開発に対する支援や、食品加工の基礎等を習得するための講座も開催されている。

実際に、現地を訪れ見学をさせていただいたが、最新の機械設備のセンターであり、スマート農業をも牽引する施設と感じた。しかしながら、豪雪地帯である横手市で思うように稼働してくれるのか、また、一般の農業者では入手不可能な高額の機械等もあり、今後どのように一般農業者に浸透させるのか模索状況であると感じた。

このセンターを拠点として、農に希望を業に力をコンセプトのもと設置した「よこて農業創生大学事業」に取り組んでいる。これは園芸振興に特化したもので、事業としては、①生産力の強化、②新規作物等の栽培実証、③新規就農者の育成、④苗供給の拡大、⑤6次産業化の支援、⑥園芸農業の魅力発信、などである。

その他にも、フォーラムやプロジェクトにも多く取り組んでいる。また、前にも書いたが、市内保育園に冬野菜を提供し「冬野菜を食べよう」給食を実施している。これは「ゆきのしたで、こおらないようにがんばるから、あまくなるんだよ」などと教える食育であり、将来の農業者を一人でも増やしたいという目的があるようだ。大切な取り組みと感じた。

5年前にも視察に来させていただいたのだが、上記したが人口減少が進んでおり深刻である。本市と比べると大変な豪雪地であり、盆地という地域であり、施設設備等にも大きな違いがあるが、高齢化や人手不足、収入減などの問題は同じであった。農業に向き合う姿勢や努力、尽力は学ぶものが多くあったと感じた。若手就農者の丹精込めて作られたメロンを試食させていただいた。大変糖度が高くおいしいメロンであった。安価でなおかつ利益の上がるメロンが多くできることと、沢山販売できることを期待する。

＊26日視察予定の湯沢市は、豪雨の影響を受け中止となった。

視　察　報　告　書

令和６年８月１日

鳥取市議会議長　西村　紳一郎　様

鳥取市議会
会派新生　寺坂　寛夫　㊞

令和６年７月24日から令和６年７月26日まで会派新生の行政視察に参加したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

調査事項
◇：**秋田県秋田市　：令和６年７月24日（水）**
◎　あきた芸術劇場整備事業について

◎整備の背景
○老朽化した県民会館（S36年築、H30５月末閉館）及び市民文化会館（S55年築、R4年９月末閉館）の機能を継承し、市はもとより県全体の文化芸術の創造拠点とするため、県と市が共同で整備した文化施設（愛称：ミルハス）
○施設概要
●設置目的　文化芸術の振興を図り、もって心豊かな市民生活及び活力ある地域社会の実現に寄与する。
●複合施設　敷地 A=17401.55 ㎡　建物延べ面積 A＝22653.08 ㎡（大ホール、中ホール、小ホール A,小ホール B、研修室３室、創作室５室、練習室９室、駐車場棟194台、その他）
●令和４年６月１日開館　　地上６F 地下 1F　RC造り
●総工費　254億円（国庫38億円、地方債186億円、一般財源30億円）
●負担割合　県57.5%　市42.5%　（運営管理費も一緒の割合）
（高機能型ホールは県民会館大ホール、舞台芸術方ホールは、市文化会館大ホールの代替施設とみなし、ホール部分はそれぞれの専有割合とし、他のスペースは県・市折半として費用負担割合とする）
○運営主体
●指定管理者　　あきた芸術劇場ミルハス AAS 共同事業体（代表者　一般財団法人秋田県総合公社）

まとめ
県と市が長年協議され、一体的に文化施設を整備し運営管理に当たることは、それぞれが別々に行う場合と比べ、総合的にメリットが大きいと整理され、具体的には、整備費や運営管理費の大幅な縮減が図られるだけでなく、施設の柔軟かつ広範な利用が可能になるなどコンパクトな市街地形成やまちづくりへのインパクト等、多くの効果が期待できるなどの理由により足り組まれたものである。
本市においては、文化芸術施設として、市民会館や福祉文化会館、文化ホールなどの老朽化施設が多くあり、今後の施設の在り方を現在検討されています。また、市独自の美術館や演劇演奏者が要望されている小ホールの設置などの問題

が、山積しています。鳥取駅周辺の活性化についても、バスステーションを含めた市民ホールなどの新築要望なども上がっており、そのようなことからも、県と市で連携出来る事は積極的に取り組む必要があると考えます。市議会としても文化芸術施設の統合を含めての新設問題に関心を強めていくことが、重要である。

◇：秋田県横手市　：令和６年７月 25 日（木）
◎　よこて農業創生大学校事業について

◎横手市の沿革と概要
　○秋田県の南部に位置し、平成 17 年 10 月 1 日に 8 市町村が合併し、新たに人口 10 万 4 千人の秋田県第 2 の都市として誕生、令和元年 10 月現在は 8 万 1 千人と減少している。世帯数は 33,876 世帯
　○東の奥羽山脈、西の出羽丘陵に囲まれた日本一広く、高低差の少ない盆地で、農業耕地面積は 176 ㎢、広大な水田地帯を形成している。
　○農業は水田農業を中心に、りんご（秋田県の 7 割以上生産）、ぶどうの果樹を始め、転作作物としてスイカ、きゅうり、トマト、アスパラガス、ホップ、そばなど、施設栽培として菌床しいたけ、ホウレンソウ
◎総農家の推移
　○減少傾向にあり、農業者平均年齢 68 歳
◎農業の課題
　○農業を支える人材の確保、育成
　○農業の生産拡大と所得向上
　○農産物の販路拡大・付加価値向上

◎よこて農業創生大学事業
　○農業の地方創生事業として、JA 秋田ふるさとと連携し、平成 27 年度に開始
　○収益性の高い野菜や花卉などの園芸に係る取り組みを強化・推進することで、農業者の所得向上と担い手の確保・育成を図ろうとするもの。
　○園芸作物の生産振興、人材育成、6 次産業化支援などの取り組みを展開

　○園芸振興拠点センターと地域種苗支援センターの 2 施設を拠点として、生産振興や人財育成に係る取り組みを展開する。
　○大学事業の取り組み項目
　　①重点振興作物の生産力強化
　　②新規作物等の栽培実証
　　③新規就農者の育成
　　④経営拡大のポート
　　⑤苗供給の拡大
　　⑥園芸農業の魅力発信
　○農業研修生の受入れ
　　①2 年間の長期研修（1 年目　園芸作に関する基礎的・基本的な知識や技術を習得）（2 年目 1 品目を専攻し、栽培から出荷調整、販売までを実践）
　○主な研修・講習
　　①担い手育成研修　②農業経営レベルアップ研修（講座・栽培講習会）
　　③6 次産業化研修　④その他の研修・講習（野菜栽培講習会・園芸入門講

座）

○園芸振興推進会議（市の関係各課と JA の関係各課と室、オブザーバーとして県振興局が参加し、取り組みを推進する会議）

①具体的な取組をプラン策定により検証する。また、毎年チェックして見直しを行う）

＊まとめ

横手市の農業は、『力ある地域資源を活用し、人を呼び、仕事を生み出す産業の振興を図ります』を振興の計画とし、目指す将来のテーマは『人をそだて、農林業で生き残れる道を開こう』であり、それに向かって、農業を支える担い手の確保、育成を図るとともに、生産基盤の整備を進め、農家の経営基盤を強化し、地域の特性を活かした作物や特産品の生産拡大に努められ、地域の活性化の推進に JA とも強力的な連携により農業創生大学校を開設するなど、人材育成に取り組まれていた。本市に於いても、鳥取市農業振興プランにのっとり、JA を始めとする農業関係団体とも強力な連携を進めながら地場産業としての農業再生推進向けて取り組むことが重要であり、さらには、若者が希望を持って就農できる農業の実現を図るため後継者づくりとしての人材育成にも強力的に取り組む事が大切である。

（様式５）

視　察　報　告　書（委員用）

令和　６年　８月５日

鳥取市議会議長　西村　紳一郎　様

鳥取市議会会派新生
砂田　典男　㊞

令和６年７月24日から令和６年７月26日まで鳥取市議会会派新生の視察（調査）に参加したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

所見等：
秋田市議会　令和６年７月24日（水）　14：30～16：00
視察内容　・あきた芸術劇場ミルハス
説明者　秋田市観光文化スポーツ部　文化振興課　課長　岡部　友明
今回視察した、あきた芸術劇場は共に老朽化した秋田県民会館（Ｓ36年築、Ｈ30年５月へ閉館）秋田文化会館（Ｓ55年築、Ｒ４年９月末閉館）の機能を継承し、秋田市はもとより秋田県全体の文化芸術の創造拠点とするため、秋田県と秋田市が共同で整備した新たな文化施設（愛称：ミルハス）です。
施設の概要として
設置目的　秋田市の文化芸術の振興を図り、もって心豊かな市民生活および活力ある地域社会の実現に寄与する。（条例第１条）
敷地　秋田市千秋明徳町２番52号（敷地面積17,401.55㎡） （元秋田藩家老屋敷の跡地だと説明を聞きました）
本体建物　鉄筋コンクリート造一部鉄骨造地上６階地下１階建て （延床面積22,653.08㎡）
開館日　令和４年６月１日

管理運営	**指定管理者　あきた芸術劇場ＡＡＳ共同事業体**
	代表者　一般財団法人秋田県総合公社
開館時間	午前９時から午後 11 時まで（ホールは午後 10 時まで）
休館日	火曜日　（ホールのみ。休日の場合は次の平日）、年末年始
主要施設	大ホール（2,007 席）、中ホール（800 席）、
	小ホールＡ（257 ㎡）、小ホールＢ（208 ㎡）、研修室３室、
	創作室５室、練習室９室、駐車場（194 台）、その他
事業費	
総事業費	254 億円（105 億円）（）内は秋田市分
① 国庫補助金	38 億円（15 億円）
	社会資本整備総合交付金・暮し賑わい再生事業
② 地方債	186 億円（77 億円）
	公共施設等適正管理推進事業債
	交付税参入 93 億円（39 億円）
③	交付税参入を除く負担額　９３億円（38 億円）
④ 一般財源	30 億円（13 億円）
① +②+④＝254 億円	実質負担③+④＝123 億円（51 億円）
負担割合	
県・市連携文化施設は、県と秋田市が共同整備・運営していくものであるが、	
高機能型ホールは県民会館大ホール、舞台芸術型ホールは、秋田市文化会館大ホ	
ールの代替施設とみなし、ホール部分はそれぞれの専有割合とし、他のスペース	
は県・市折半として費用負担割合を算定する。	
なお、この負担割合の考え方は、開館後の運営管理費にも適用する。	
「上記に基づく負担割合」　県は 57.5%　秋田市は 42.5%	
秋田市では、持続可能な都市の実現にむけ、投資効率が高く、コンパクトで	
成熟した市街地形成を図る事を基本としてまちづくりに取り組んできた。	

2008年に策定した秋田市中心市街地活性化基本計画では、「中心市街地外の文化施設等は、建て替え時に中心市街地内への整備を優先して検討する」ことなっていた。こうした行政改革やまちづくりの視点から、秋田市文化会館については、中心市街地への移転も視野に将来の在り方を検討していた。一方、秋田県においても、本市と共通する行政改革やまちづくりの観点を含め、老朽化が著しい秋田県民会館の将来の在り方を検討していたところでした。

結果的に、同じ課題を抱え、同じ方向性で将来の在り方が検討されていた二つの施設が結び付き、秋田市と秋田県の連携による共同整備を目指すこととなった。

鳥取市に於いても、鳥取駅周辺性基本計画が計画され、鳥取駅周辺を再生することで、鳥取駅を中心にひと・もの・ことが集積し、交流の輪が人材を育成し続けるまちづくりの好循環を生み出すための基本的な方向性を示されました。

この計画は、鳥取県や麒麟のまち圏域の計画と整合を図りつつ、本市の上位、関連計画に則して位置図けられました。

あわせて、鳥取市中心市街地活性化基本計画に沿って中心市街地に点在しているとりぎん文化会館 1993年5月31日完成（2000人収容）、鳥取市民会館、19674年完成　8930席）、県民ふれあい会館、2012年12月改修（500人収容）

鳥取市福祉文化会館や鳥取市文化ホール 1967年完成（930人収容）などの大中ホールを有する施設が点在しています。

いずれも、開館してからかなりの年月が経過し、近い将来には、各館とも更新の時期が訪れると思います。

鳥取市では、目指す将来像として、「いつまでも暮らしたい、誰もが暮らしたくなる、自信と誇り・夢と希望に満ちた鳥取市」掲げています。一方、鳥取県は、基本理念として、未来への挑戦～持続可能な地域の発展をめざして～を掲げています。お互いが思う気持ちは一緒の方向性を目指しています。限られた資源を活用し、今後の鳥取県・鳥取市が発展を続ける方策を模索しお互いが協力しながら、打開策を協議して頂きたいと思います。

視察先　　横手市議会　（横手市園芸振興拠点センター）

視察項目　　よこて農業創生大学校事業

所見等：

今回の視察先、横手市園芸振興拠点センターは令和元年11月に一度視察させて頂きました。

横手市は人口減少が毎年のように約1,000人もの流出が続いており、前回訪問時には、89,000人の人口が今回は81,500人と7,500人もの人口流出が止まらない状況が続いています。そのような中で25%が農地で90%が水田（秋田こまち）りんごは70%を占め令和4年度274億円と秋田ではトップ、米は44%と総農家数は高齢化に伴い法人化等が進み減少している中で健闘していました。

農業創生大学事業は平成27年よりＪＡ秋田とふるさと連携し農家所得の減少横手市は稲作主体の地域で米価の影響を受けやすいため米依存からの脱却が課題の為に複合部門に収益性の高い「園芸作物」の導入を推進し、所得向上に結び付ける。横手市は米をベースに野菜とか、果物，花木を進めて所得向上を図る。事業実施に至るまでには、農家所得が年々減少するなか、市とＪＡとの園芸作物振興に関する連携協定に基づき、目的達成に向けた取り組みを推進するために組織した会議　構成は、市は農林部農業振興課、食農推進課、商工観光部横手の魅力営業課（販売を担当）ＪＡは、営農経済部園芸課、営業企画課、食農販促課、担い手支援室。　県は秋田県平鹿地域振興局がオブザーバーとして参加。

よこて農業創生大学事業の目的を達成するための実践計画

・策定主体は「園芸振興推進会議」計画期間は3年間。

・毎年ローリングを実施し、取り組み状況を検証

農業研修生の受入れ。　新たに市内での就農を目指す方を農業技術研修生として受入れ、2年間の長期研修を実施。

1年目には、園芸作物に関する基礎的・基本的な知識や技術を習得。

2年目には、1品目を専攻し、栽培から出荷調整、販売までを実践。

R6年度は10名の研修生が在籍。H24度からR5年度まで40名が研修終了。

R6年度は「いぶりがつこコース」を新設。

よこて農業創生大学校では、園芸や6次産業化に取組む人材の育成に取り組むために、①担い手育成研修・長期実践研修2年間、短期園芸研修3日間。

② 農業経営レベルアップ研修（農業経営者向け）農業経営実践レベルアップ講座・新規作物栽培講習会など　③6次産業化研修・6次産業化スタートアップ研修など。④その他の研修・講習　・市民向け野菜栽培講習会・働きながら学ぶ園芸入門講座など。

また、食農体験の受け入れとして、園芸振興拠点センターの機能を活用し、子ども向けお体験プログラムを実施。保育園：いちご収穫体験の実施、小学生：野菜の定植・収穫体験　大雄小園芸部　中学生：オープンスクールの実施

施設整備に関しては、前回令和元年11月当時よりビニールハウスを一棟増築されていました。

6次産業化支援施設棟は、地元の農産物を使用した新商品開発に対する支援や食品加工の基礎を習得するための講座を開催。

6次産業に取り組もうとする個人や団体の方が農産加工にチャレンジする場所として利用されています。　施設利用は有料で貸し出し中です。

栽培実証施設では、前回訪問時では、各種イチゴを栽培していましたが今回は、イチゴ栽培は規模を縮小し、保育園児や小学生等への体験用に規模を縮小して栽培されていました。残りはジャム等に加工されていました。

就農農家が年々減少していく中で、農家の法人化などに集約した結果、全業種の10%位の出荷量を確保し、270億円規模を維持されています。横手は冬の期間が長く、例年6月位まで農作物が育成出来ない状態の中で大変に努力され出荷量を確保されています。

（様式２）
別紙

視　察　報　告　書（委員用）

令和６年８月１日

鳥取市議会議長　西 村　紳　一　郎　様

鳥取市議会　会派新生
上　杉　栄　一　㊞

令和６年７月24日から７月26日まで鳥取市議会の視察（調査）に参加したので、その結果を下記のとおり報告します。

秋田市

秋田市の概要

人口　約２９７０００人

面積　９０６．０７㎢

議員定数　　３６名

あきた芸術劇場整備事業について

経　緯

秋田県民会館（Ｓ３６年築、Ｈ３０年５月末閉館）及び秋田市文化会館（Ｓ５５年築、Ｒ４年９月末閉館）の機能を継承し、秋田市はもとより秋田県全体の文化芸術の創造拠点とするため、秋田県と秋田市が共同で整備した新たな文化施設（愛称　ミルハス）

1. 施設の概要

設置目的　秋田市の文化芸術の振興を図り、以て心豊かな市民生活及び活力ある地域社会の実現に寄与する。

敷　　地　秋田市千秋明徳町（敷地面積 17.401.55 ㎡）

本体建物　鉄筋コンクリート造一部鉄骨造　地上６階地下１階
（延べ床面積 22,635.18 ㎡）

開 館 日　令和４年６月１日

管理運営　指定管理者　あきた芸術劇場 AAS 共同事業体

開館時間　午前９時から午後１１時まで

主要施設　大ホール(2,007 席)、中ホール(800 席)、小ホール A(257 ㎡)
小ホール B(208 ㎡)、研修室３室、創作室５室、練習室９室
駐車場棟(194 台)

2. 事業費

総事業費　２５４億円(１０５億円)　※()内は秋田市分

① 国庫補助金　３８億円(１５億円)社会資本整備総合交付金⇒暮らしにぎわい再生事業

② 地方債　１８６億円(７７億円)　公共施設等適正管理推進事業債
※交付税参入９３億円(３９億円)

③ 交付税参入除く負担額９３億円(３８億円)

④　一般財源　３０億円(１３億円)

①＋②＋④＝２５４億円　実質負担③＋④＝１２３億円(５１億円)

3. 負担割合

県・市連携文化施設は、県と秋田市が共同で整備・運営していくものであるが高機能型ホールは県民会館大ホール、舞台芸術型ホールは、秋田市文化会館大ホールの代替施設とみなし、ホール部分はそれぞれの専有割合とし、ほかのスペースは県・市折半として費用負担割合を算定する。

なお、負担割合の考え方は、開館後の運営管理費にも適用する。

『上記に基づく負担割合　県５７．７％　秋田市４２．５％』

所　見

県庁所在地である秋田市は、文化施設や体育施設など、機能が類似する県と市の施設がいくつかあるが、長年にわたりそれぞれの施設間で連携が図られてきた。更には、中心市街地の活性化について、秋田市と秋田県は課題を共有し、市街化再開発事業で連携の実績を積み重ねてきた。このような背景があったからこそ、秋田市と秋田県が二つの施設を継承する一つの施設を共同整備するという選択肢が決まった。(提供資料抜粋)

本市では、駅周辺再整備事業計画が６月制定され、概ね１０年をかけて周辺整

備に取り組んでいく。６月定例会での私の質問に対して、市長は、駅周辺に整備が計画されている公共・公益施設に老朽化が進んでいる市民会館のホール機能を組み入れる方向で考えていく旨の答弁があった。秋田芸術劇場は、２つの小ホールを整備している。地元の芸術家団体から３００席規模の音楽ホールの整備の要望が出されている。

秋田芸術劇場の来場者数は、フリースペース利用を含め４８万人（令和５年度）の入場者がある。本市の文化芸術の振興はもとより、中心市街地の活性化に資する

ためにも早期の取り組みに期待する。

鳥取市と県の連携も市と県との連絡会議も立ち上げられた。５０年前の「鳥取駅連続立体高架事業」では、県と連携して駅高架事業や駅前整備事業が完成した。今後は、県と連携を密にして駅周辺再整備に取り組むべきと考える。

横手市

横手市の概要

人　口　約 81,000 人

面　積　692.8 ㎢

議員定数　　２６人

横手農業創生大学事業について

目　的

横手市園芸振興拠点センターでの栽培実証等を通して、野菜・花きなどの園芸栽培に関する基礎的・実践的な知識・技術を広く習得し、卒業後の農業経営に生かす。

１年目

栽培実証作物を活用した園芸栽培に関する基礎的・基本的な知識や技術の習得を目指す。

① 基礎実習：実技（育苗・栽培管理・収穫・出荷調整ほか）

・栽培実証作物を活用した栽培技術の基本事項を習得

② 基礎実習：座学（資材・土壌・肥料・防除・経営ほか）

・専任指導員からの基礎知識の習得（栽培・経営）

③ 基礎研修（外部講師講演・視察）

・栽培レベルアップ・農業経営・マーケティング・実例紹介・農業簿記経理等

④ 県農業研修センター主催講習会等への参加

⑤ 販売実習

商品としての販売・消費者からの評価・取引の流れ

⑥ ２年目準備

１年間の振り返り・専攻作物決定・２年目計画

２年目

① 応用実習・実技(育苗・栽培管理・収穫・出荷調整ほか)

専攻作物を栽培から出荷調整・販売まで習得

② 応用実習、座学(資材・土壌・肥料・防除経営ほか)

専任指導員からの応用知識の習得(栽培・経営)

農業簿記ソフトによる仮想農業経営の実施

③ 基礎＆応用研修(外部講師講演・視察)

農業情勢・マーケティング・営農管理・実例紹介・言質研修　等

④ 県農業研修センター主催講習会等への参加

土づくり・妨害中防除・肥料・農業経営・先進地視察・農業簿記経理等

⑤ 販売実習(7～10 月)

商品としての販売・消費者の評価・取引の流れ

⑥ 経営計画策定 11～3 月)

２年間の振り返り・経営計画策定・就農準備

➡就農開始(新たな農業経営者)

所　見

横田市園芸振興拠点センターで「横手農業創生大学事業」について説明を受けた。横田市園芸振興拠点センターの訪問は令和元年１１月以来２度目となる。

前回の視察では、「食と農からのまちづくり事業」のテーマで６次化産業課支援施設と農業ハウスを見学した。今回は、新たな農業経営者育成の取組について研修を受けた。園芸を経営の柱とする農業者の育成は、年５人の新規就農者の排出と５年後の収納定着率 100%を目標としており、令和４年新規５人、定着率 100%令和５年新規４人、定着率 100%を達成している。本市は、国府町に農業公社があり、新規農業就農者を対象とした農業研修等を実施している。園芸等に特化す

ることにより多くの収益可能となる横手市の取組は注目される。